

多摩美術大学における今後の教育実習の実践と課題

ー教育実習事後アンケート分析を手がかりとしてー

西谷成憲
多摩美術大学 教職課程

本稿の目的は、本学教職課程の今後の指導の課題や在り方について検討を行うことである。
実習前・実習中・実習後の質問を行い、自由記述回答を類型化して整理を行った。

実習前と実習時の教科指導(授業実践) 関係の回答からは、学生自身が事前に教育実習校との緊密に打ち合わせを行うこと、教職課程において教材研究、指導案作成や模擬授業等の教科指導の充実化を図る取り組みが課題であることが改めて確認された。実習生の不安感を軽減させる意味でも重要な課題である。実習後の教職志望意識の変化では約 86%の学生は教職志望に良好であったが、志望の意欲を失ったと回答した学生が約 11%であった。実習前における到達目標の明確化、学生の適性・能力・意欲を確認する事前指導の充実を図る必要性が明らかとなった。これらの結果を踏まえ、今後の事前事後指導の在り方について課題点の整理を行った。

キーワード：教育実習、不安感 事前事後指導 教科指導 生徒指導

はじめに

今日の学校教育の課題がいじめや不登校、貧困問題等、多様化・複雑化している。社会から信頼される「チームとしての学校」づくりを進めるために、保護者・地域との連携・協働関係を築く能力を備えた教員の養成が課題とされている。

1980 年以降、教育実習が質・量ともに大きな変化がもたらされてきた。量的側面においては、教育実習事前・事後指導 1 単位必修 (1988 年)、実習期間が 2 週間から 4 週間に拡大 (1998 年) があげられる。質的側面においては、福祉体験、ボランティア体験などの多様な体験機会を養成プログラムに確

保するだけではなく、教育実習の質保証のために、大学ー教育委員会ー学校の実習体制の改革の連携化が図られてきている。

2006 年 7 月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」⁽¹⁾では、教職課程の質的水準の向上の具体策として、大学教員と実習校の教員と積極的な連携、到達目標の明確化、学生の適性・能力・意欲を確認する事前指導の充実、実習中止を含めた適切な対応そして母校実習の見直しなどが提言された。

多摩美術大学における教員養成においては、教育実習のねらいを以下のように掲げている。

【教育実習Ⅰ】

教育実習Ⅰは、教育実習事前指導 (3 年後期) と教育実習後指導 (4 年後期) がある。教育実習事前指導では、教育実習の心構えとして、その意義や準備の仕方を理解させる。さらに中・高の現場の先生による特別講義を行い、現実の学校教育と教師理解を深める。教育実習後指導では、実習体験報告を通してその追体験をし、さらに他学生と情報を共有して実習の意義を再認識する。

【教育実習Ⅱ・Ⅲ】

実習の内容は、美術科教育指導のみならず、学級経営や生徒指導及び教育活動全体を通して多岐にわたっている。実習を通して、専門教科の指導のみならず生徒理解を円滑に行うために必要とされるコミュニケーション能力と美術教育の指導力を養うことを目的とする (「教育実習Ⅱ」は 中学校教諭普通免許状取得希望者対象。「教育実習Ⅲ」高等学校教諭普通免許状取得希望者)

本学の教育実習においては、美術教育の授業力と生徒理解力及びコミュニケーション能力の育成に力点を置き、大学での専門領域と教職領域を通して形成した指導理論を教育現場で実践する力の育

- 第一に、現実の学校の現場で、児童・生徒と直接、接する教育活動を体験することで、教員の仕事や学校運営、生徒の実態について総合的な認識・理解を得ることである。
- 第二に、大学で学んできた教科・教職にかかわる知識や理論・技術と、実際の児童・生徒を対象とした教育活動とを相互に関係させて学ぶことである。
- 第三に、教育実習は、学生にとっては、自分の教員としての適性や能力を確かめ、教員への道を選択するのか否かを見きわめる重要な関門となる。つまり、実習を通して教職に対する意欲を高め、使命感を自覚することが求められているということである。

前述の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」において、「教育実習は、学校現場での教育実践を通じて、学生自らが教職への適性や進路を考える貴重な機会である」と述べている。本学の教職履修学生においては、制作活動、広告業界、デザイナーなどの志望学生が多くを占めている。4年生で「教育実習」があり、3年次後期に事前指導、実習後の4年後期に事後指導の一環として、「教育実習事後アンケート」を行っている。本稿は2016年度に行ったアンケート分析の結果から、本学教職課程の今後の指導の在り方について検討を行う。

I . アンケートについて

1. 実施：2016 年 11 月中旬から下旬

2. 調査対象：2016 年度教育実習生

- (1) 実習生数 132 名 回答人数 121 名
- (2) 各学科に於ける教育実習生の割合。

例年、1 年時には入学者全体の 25%前後が教職課程を希望しているが、実習時には半数近くになっている。2016 年度教育実習生は 132 名であった。所属学科の割合順次では、「油画学科」(49.2%)、「工芸学科」(12.9%)、「日本画学科」(9.8%)、次いで「彫刻学科」(8.3%) である。ファインアート系(日

成を目標としている。

高野和子、岩田康之は教育実習の意義について以下の 3 点に集約している。⁽²⁾

表 1 実習生所属学科一覧

学科名	実習者数	%	入学定員数
日本画	13	9.8	} 195
油画	65	49.2	
彫刻	11	8.3	
工芸	17	12.9	60
グラフィック	3	2.3	184
プロダクト	1	0.3	} 104
テキスタイル	4	3.0	
環境デザイン	2	1.5	80
情報デザイン	7	5.3	122
芸術	4	3.0	40
科目等履修生	5	3.2	
合計	132	100.0	815

本画、油画、彫刻、工芸) は約 80%、デザイン系(グラフィック、プロダクト、テキスタイル、環境デザイン、情報デザイン) は約 13%、「芸術学科」は約 3%、「科目等履修生」は約 4%を占めている。「科目等履修生」は大学卒業生、大学院生である。圧倒的に「ファインアート系」の学生が占めている。なお、工芸学科は本学ではデザイン系に置かれているが、本稿ではファインアート系に分類した。

実習は母校実習(85.0%)、協力校実習(15.0%) で、母校実習が多くを占めている。校種別では、高等学校、中学校、中等教育学校の順である。協力校

表 2 実習校の内訳表

実習校	校種		中等教育学校		高等学校		計	%
	公立	私立	公立	私立	公立	私立		
母 校	35	1	3	18	34	21	112	85.0
協力校	14				5	1	20	15.0
計	48	1	3	18	41	21	132	100.0

は公立中学校が 14 校、高等学校は 6 校(公立高校が 5 校、私立高校が 1 校) である。学生は 3 年次の実習希望では高等学校実習が大半を占め、中学校実習を希望する者が少ない。しかし、昨今特に高等学校では専任美術教諭がいないため、実習希望者が多いために高等学校での実習の内諾がとれない学生が多くなっている。中学校実習には高等学校実習の内諾がとれなかった学生達が多くを占めているのが現状である。

3. 調査内容および分析方法

- (1) 調査項目を「A. 教育実習前の質問」、「B. 教育実習中の質問」、「C. 教育実習後の質問」の三部構成で行った。学生が教育実習体験を通してどのように変容したのかを検証するとともに、本学教員養成の諸課題を明らかにすることを目的とした。
- (2) 調査項目は、「A. 教育実習前の質問」3 項目・3 質問、「B. 教育実習中の質問」4 項目・10 質問、「C. 教育実習後の質問」4 項目・4 質問について、主に自由記述をしてもらい、その結果を項目別に類型化して

4. 2016 年度 教育実習事後アンケート

A. 教育実習前の質問

- 教育実習に入る前の気持ちについて、当てはまる番号を○で囲んで下さい。
○選んだ理由を書いて下さい。(簡潔に)
- あなたが教育実習に立てた目標は何ですか。(簡潔に)
- どんな準備をして臨みましたか。(簡潔に)

B. 教育実習中の質問

- 授業実習の内容と発見 (簡条書きでかまいません)

まとめた。併せて自由記述の回答事例をとりあげた。

(3)五択項目は、以下の 6 質問である。

A. 教育実習前の質問

- 教育実習に入る前の気持ちについて、当てはまる番号を○で囲んで下さい。
- #### B. 教育実習中の質問 (簡条書きでかまいません)
- 授業実習の内容と発見
- (5)教材研究を十分に行って、生徒に提示できましたか。(○で囲んで下さい)
- (6)学習指導案通りに生徒が良く理解できる授業展開ができた。(○で囲んで下さい)

2. 学級指導関係

(3)生徒とのコミュニケーションをとることができましたか。(○で囲んで下さい)

4. 先生たちとの関わりについて

(1)先生方とのコミュニケーションがうまくとれましたか。(○で囲んで下さい)

C. 教育実習後の質問

- 教職志望意識の変化 (何れかに○をつけて下さい)

- (1) 授業実習担当学年と授業時数（総数）について書いてください。
- (2) 研究授業 題材名：
- (3) 研究授業のねらい：（簡潔に）
- (4) 教材研究作成上で何に苦勞しましたか。
- (5) 教材研究を十分に行って、生徒に提示できましたか。（○で囲んで下さい）
- (6) 学習指導案通りに生徒が良く理解できる授業展開ができた。（○で囲んで下さい）
- (7) その他、授業を実習する上でどんな苦勞がありましたか。（簡潔に）
- (8) その他に指導した美術科授業がありましたら、題材名（対象学年も）をあげて下さい。

2. 学級指導関係

- (1) 学級指導を行った主な内容は何ですか。(担当: 年 組)
- (2) 学級指導で力を入れた点や苦労した点は何ですか。(簡潔に)
- (3) 生徒とのコミュニケーションをとることができましたか。(○で囲んで下さい)

3. 生徒たちとの関わり（簡潔に）

- (1) 学級活動で発見したこと。
- (2) 休み時間に発見したこと。
- (3) 給食時間・清掃時間に発見したこと。
- (4) 学校行事等の場面で発見したこと。
- (5) 部活動などの場面で発見したこと。
- (6) その他の場面で発見したこと。

4. 先生たちとの関わりについて

- (1) 先生方とのコミュニケーションがうまくとれましたか。(○で囲んで下さい)
- (2) 先生方から教わったこと、学んだこと。(簡潔に)

C. 教育実習後の質問 (何れかに○をつけて下さい)

1. 教職志望意識の変化
 - a. 教員志望だったが、一層教員になりたくなった。
 - b. 教員志望ではなかったが、教員になりたくなった。
 - c. 教員志望ではなかったが、教員もよいなと思い始めた。
 - d. 教員志望だったが、教員になりたくなかった。
 - e. 教員志望ではなかったが、今もその気持ちに変わりはない。
2. 教育実習を通してよかったこと、嬉しかったことはどんなことですか。(簡潔に)
3. これだけは準備しておけばよかった、またはこのことについて勉強しておけばよかったと思うことは何

ですか。(簡潔に)

4. 教育実習を通して厳しかったこと、課題点はどんなことですか。(簡潔に)

Ⅱ. アンケート結果と分析

A. 教育実習前の質問

1. 表3は、「1.教育実習に入る前の気持ちにつ

いて」という質問項目について、「とても不安」から「辞めたかった」までの5項目から1つ選択をした120名の回答をまとめたものである。

表3 教育実習に入る前の気持ちについて

	とても不安	少し不安	不安はなかった	楽しかった	辞めたかった
中学校	23	21	0	2	3
中等教育学校	11	6	0	5	0
高等学校	22	18	2	4	3
合 計	56 (46.7%)	45 (37.5%)	2 (1.7%)	11 (9.2%)	6 (5.0%)

この結果を見ると、全体で約90%の学生が教育実習に不安感を抱いており、「辞めたかった」と回答した者が5%いた。一方、実習を楽しみにしていた学生は約10%であった。

表4は「とても不安」、「少し不安」、「辞めなかった」と回答して、「○選んだ理由を書いて下さい。」の質問項目にその理由を書いた74名の回答を類型化したものである。

表4 不安感の内訳

不安感の内容項目	回答者数	%
(1) 授業についての不安感	26	35.1
(2) 生徒への対応についての不安感	13	17.6
(3) 実習校に対する不安	10	13.5
(4) 未経験からの不安	7	9.5
(5) 事前の打ち合わせや事前準備への不安	6	8.1
(6) 健康面についての不安感	4	5.4
(7) 友人・先輩からの情報からの不安	4	5.4
(8) コミュニケーション能力についての不安	3	4.1
(9) 指導教諭との関係性についての不安感	1	1.4

表4は、約90%の学生が持った不安感の内訳である。

学生にとって「(1)授業」や「(2)生徒への対応」に対する不安が大きなプレッシャーとなっている。「(3)実習校に対する不安」は、在学中に母校が荒れていた状態だったためや、母校の高校が中等教育学校に

形態が変わったためなどである。「(4)未経験」、「(5)事前の打ち合わせや事前準備」、「(8)コミュニケーション能力」などの不安は、分かり易い授業ができるか、生徒との信頼関係が築けるかなど、教科指導と生徒指導の両面にまたがっている不安である。授業実践不安と生徒関係不安が大きな不安要因となって

いる。「(7)友人・先輩からの情報からの不安」は実習情報を影響を受けたためである。
習を終えた同僚から実習の大変さ困難さなどのマイ

(回答事例)

「1 とても不安だった」、「2 少し不安だった」
(1) 授業についての不安感
・模擬授業などを行ったことがなく、いきなり生徒の前に立つことが不安でした。
(2) 生徒への対応についての不安感
・人前で話すことがとても苦手で緊張で震えてしまうから。生徒とコミュニケーションがとれるか不安だったから。
(3) 実習校に対する不安
・自分が実習にいく母校は荒れている学校だから。
(4) 未経験からの不安
・母校とはいっても、生徒として通って居たときとは違って、先生も生徒も自分を教員としてみると思うと、未熟な自分がやっていけるか心配だった。
(5) 事前の打ち合わせや事前準備への不安
・母校ではあるが、美術の先生が初対面であること。事前打ち合わせが直前で、それまで詳細が分からなかった。
(6) 健康面についての不安感
・実習自体の不安はあまりなかったが、自宅から実習校までが遠かったのが不安材料として残った。私立で週6日あり、体力がもつか心配だった。
(7) 友人・先輩からの情報からの不安
・先輩方や先生のお話で、“大変辛い”と聞いており、不安だった。毎年辞退される方、学校から「来ないで下さい」と言われる方もいるらしかったので。
(8) コミュニケーション能力についての不安
・実習にどんな風に行動し、何をしていけば良いのか、全く分からなかった。中学生の生徒とどうコミュニケーションをとれば良いのか分からなかった。
(9) 指導教諭との関係性についての不安感
・母校だったが自分を担当してくれた先生方がほとんど異動して学校にいなかったから。
「3 不安はなかった」
・指導案も作っていたし、妹の行っている学校で話を聞いていたから。
「4 楽しみだった」
・母校の先生方がどういったことを考えながら授業を組み、学校作りをしているのか、生徒時代とは違う視点で見ることに興味があったから。
「5 実習をやめたかった」
・実習校に余り良い思い出がない上に、ちょうど実習中に卒制のための大事な授業が入っていたから。

2. 表5は「あなたが教育実習に立てた目標は何ですか。」という質問項目について、自由筆記をしてもらい、その理由を書いた87名の回答を類型化し

表5 実習に立てた目標

目標項目	回答者数	%
(1) 教科指導	48	55.3
(2) 生徒理解・コミュニケーション	25	28.3
(3) 意欲的に取り組む	9	10.3
(4) 教師としての学校体験	5	5.7

(回答事例)

(1) 教科指導
・学ぶ楽しさを伝える。一日一つ新しい課題を見つめる。
・美術の授業を通してものを作ること、表現することや楽しさを実感してもらうような授業を行う。
(2) 生徒理解・コミュニケーション
・生徒の名前を覚え、積極的に交流する。
・生徒と積極的に関わりを持ち、教員という仕事について実践の中で考える。
(3) 意欲的に取り組む
・失敗を恐れずに積極的に行動する。
・「優しい先生」ではなく、「しっかりとした頼れる先生」になれるように心がけた。
(4) 教師としての学校体験
・生の教育現場の様子をつかんでくる。

3. 表6は実習前に「どんな準備をして臨みましたか。」という質問項目について、自由筆記をしてもらい、その理由を書いた70名の回答を類型化したものである。

表6は「実習の準備」の内訳である。美術教科指導の「(1)授業準備」が67%と圧倒的な割合である。ついで、「(2)生徒理解」が8.6%、「(3)事前の打ち合わせなど」と「(4)実習を終えた友人、先輩からの助言」がそれぞれ7.1%である。「(5)その他」は実習時の健康管理、出勤時刻を遵守するための実習生活の対応などである。

「(3)事前の打ち合わせなど」は実習校との打ち合

たものである。

「教科指導」と「生徒理解・コミュニケーション」で約82%を占めている。これらは前述した不安感の(回答事例)の「(1)授業についての不安感」、「(2)生徒への対応についての不安感」、「(8)コミュニケーション能力についての不安」である授業実践不安と生徒関係不安に対応している。実習に臨む目標は不安感との合わせ鏡といえる。多くの実習生各自、実習の目標を持って臨んでいる。

表6 実習の準備

準備した内容項目	回答者数	%
(1) 授業準備	47	67.1
(2) 生徒理解	6	8.6
(3) 事前の打ち合わせなど	5	7.1
(4) 実習を終えた友人、先輩からの助言など	5	7.1
(5) その他	7	10.0

わせで、実習が始まる1週間か2週間ほど前に、実習校は実習生を各学校に集め、実習について具体的な打ち合わせを含む事前指導を実習校として行うことが一般的である。中には、3週間の実習を全て任され、授業の導入から評価までを完結させる授業準備のために、実習数ヶ月前から実習校の

指導教諭と何度も打ち合わせを行って臨む学生もいる。打ち合わせ時の教科指導内容、学校やクラスの実態などの把握は、「(1)授業準備」や「(2)生徒理解」を充実させる重要な資料である。教育実習を充実したものにするか否かは、実習校との打ち合わせにかかっているとと言っても過言ではない。

(回答事例)

(1) 授業準備
・事前指導で「デザインは考えて作られているということを理解できるような授業を行って下さい」と伝えられていたので、その目的を忠実にこなすようにキャラクターデザインについて、パワーポイントでスライドなどを作り、準備した。
・指導案の準備や担当クラスの生徒とコミュニケーションを取るためのアンケート用紙作成、学内展示のための作品の準備、他デモンストレーション。
(2) 生徒理解や自己紹介資料づくりなど
・学級指導のクラス名簿をもらい、それぞれ生徒の特徴を担当の先生に伺った。 HRの生徒の顔と名前を全員覚えた。授業で見本としてみせる教材の制作。
(3) 事前の打ち合わせなど。
・事前に実習校へ赴き、授業内容の把握や実際に生徒がつくった作品を観たり、生徒が扱っている素材(木彫やアクリル絵の具)を研究した。
・事前に出されたデッサンの見本制作(2枚)、中学校の美術の教科書、想定して作ったデッサンの授業の指導案、メモ用ノート。
(4) 実習を終えた友人、先輩からの助言など
・前期に行った人に情報を聞いたりするなど、心の準備を特に行った。
・過去の先輩方の資料を参考に指導案の内容を詰めるようにしました。
(5) その他
・体調管理を万全に臨み、生徒達と交流をする。
・積極的に関わる。ミスや寝坊をしない。

B. 教育実習中の質問

1 授業実習の内容と発見

美術の授業は教育実習の中心的な活動である。実習の1週目は授業を中心に指導教諭の指導の下に、学習指導をはじめとして学校の教育活動に参加して2週目以降の教壇実習をむかえる。そして3週目には研究授業を行うことが一般的である。授業準備を行い、教える内容の教材研究を行い、美術教員に指導・助言を受けて学習指導案を修正して、初めての授業実習に臨む。

本章では、実習生の教科指導の実態把握を試みた。アンケート調査で行った質問項目の「(1) 授業実習担当学年と授業時数(総数)」について書いてください。」「(2)研究授業 題材名」、「(4)教材研究作成上で何に苦労しましたか。」、「(6)学習指導案通りに生徒が良く理解できる授業展開ができた。」、「(7)その他、授業を実習する上でどんな苦労がありましたか。」について、五択質問の集計及び自由記述を類型化したものである。

(1)「1－(1) 授業実習担当学年と授業時数(総数)」 表7は美術の授業時数について103名の学生の回答について書いてください。」 表7は美術の授業時数について103名の学生の回答をまとめたものである。

表7 中学校、中等教育学校、高等学校の授業時数一覧

校 種	回答者数	授業時数	備 考
中学校	44	11.7	
中等教育学校	19	14.5	12名(中学部)
高等学校	40	16.6	

三校種のうち、中等教育学校実習生は主に中学部で教科指導、学級指導を行った学生が12名である。教科指導において、中学校実習56名、高等学校実習47名であった。授業時数は高等学校16.6単位時間、中等教育学校14.5単位時間、中学校11.7単位時間の順である。実習校によって授業時数は異なっている。特に公立中学校実習では美術の授業時間やクラス数そして学校行事等が加わり、授業時数が少ないケースが多々見られる。

(2)「1－(2)研究授業 題材名」

表8は、研究授業で行った題材名について回答した84名の学生の回答を類型化したものある。

研究授業は教育実習の2週目に決まるケースが多い。主に高等学校実習においては、実習生が独自の完結した授業を任せられる授業もある。中学校

表8 研究授業 題材・領域

研究授業題材・領域名	回答者数	割合(%)
(1) 工芸、彫刻、版画制作	14	17.5
(2) 絵の具で描く(水彩・油彩)	12	15.0
(3) 色と形、光と陰の特徴を知ろう	12	15.0
(4) デザイン	12	15.0
(5) 鑑賞	11	13.8
(6) デッサン、クロッキー	8	10.0
(7) 自画像を描く	7	8.8
(8) 素材、顔料づくり	3	3.8
(9) 音楽を聴いて伝えよう	1	1.3

では指導教諭の年間指導計画に沿った授業の導入や引き継ぎの時間の授業が多く行われている。

下記の「研究題材の準備回答事例」は、「(1)工芸、彫刻、版画制作」から「(7)自画像を描く」までの授業名と授業のねらいを含めて取りあげた。

(回答事例)

(1) 工芸、彫刻、版画制作
・「カラフルランブシェード」：和紙のもつ特徴を知る、色彩の配色や混色について学ぶ、他者の作品の良さや美しさを鑑賞する。
(2) 絵の具で描く(水彩・油彩)
・「届け!心のメッセージ」：生徒達が日頃、思っている、感じていることを線や色で表現し、自分を見つめ直す。
(3) 色と形、光と陰の特徴を知ろう
・「色のかけらと組み合わせよう」：色の基本的な効果を学ぶ。学んだ色の効果を活かして自分で考えて表現できる土台をつくる。

- (4) デザイン
- ・「身の回りのデザイン」：“身の回りのもの”を中心に、デザインの種類や用途について紹介し、デザインの多さ（人工物は全てデザイン!）やその大切さについて伝える。
- (5) 鑑賞
- 「あなたは どう見る?絵を見て考えよう」：絵画を鑑賞し、感じたことを自身の言葉で伝えたり、他人の意見を聞くことで作品の面白さや良さを実感をもって知ってもらう。
- (6) デッサン、クロッキー
- 「鉛筆による手のデッサン」：陰影の濃淡変化を観察し、ハッチング技法を用いてそれらを描くことを通して、立体感を表現する力をつける。友人の作品鑑賞から個性の違いを意識させる。
- (7) 自画像を描く
- ・「自画像」：対象を深く見つめ感じ、取る力や想像力を高め、豊かに発想、構想する能力や自分の表現方法を創意工夫し、創造的に表現する能力を伸ばす。

(3)「1－(4)教材研究作成上で何に苦労しましたか。」

表 9 は、日々の教科指導の準備、研究授業の準備での苦労について回答した 84 名の学生の回答を類型化してまとめたものある。

表9 教材研究、指導案作成上での苦労

苦労した事項	回答数	%
(1) 指導案の作成	34	40.5
(2) 参考資料の作成準備	25	29.8
(3) 時間配分	10	11.9
(4) 専門外	6	7.1
(5) 専門用語、言葉遣いなど	5	6.0
(6) 生徒への指導配慮	2	2.4
(7) 環境整備	1	1.2
(8) 評価	1	1.2

(回答事例)

- (1) 指導案の構成
- ・ 導入の部分でどうすれば、生徒が興味を持てるか考えるのに苦労しました。
- ・ 内容の整理：伝えたいことが多すぎて、分かり易く簡潔にすることが大変だった。生徒の反応を想像して授業を組み立てることが難しかった。
- ・ 「どのような疑問が生徒から出るか?」を予想して授業の説明を考えるのは難しかったと思います。
- (2)参考資料の作成準備
- ・ 板書になれていないため、あらかじめ紙に書いておくなどの工夫が必要だった。また絵の提示の仕方が

- 難しかった。
- ・ スライド資料の作成で何を参考作品にするか、生徒の関心をひく仕掛けをどう入れるかに苦戦した。
- (3) 時間配分
- ・ 最初の方は時間配分に苦労した。生徒がどれくらいの理解、スピードで授業を進められるかを想定すること
- ・ 50 分という短い時間の中で、ピカソの生涯とゲルニカの起源、ワークシートに記入という流れをおさめる練習。
- (4) 専門外
- ・ デザインというジャンルは専門外だったので教材集め、題材選びに於いて苦労した。
- ・ 平面を常に制作してきたので、立体制作に関しての知識・技術に疎く苦労した。
- (5) 専門用語、言葉遣いなど
- ・ 授業の流れを考えることや中学生が理解できるような説明や言葉選びをすることに苦労しました。
- ・ 油画材料の扱い方のプリントを作成しましたが、うっかり専門用語に説明をつけ忘れることのないように図や写真を用いて伝わりやすい、見やすいを意識しました。
- (6) 生徒への指導配慮
- ・ 作品制作に手がなかなか動かない生徒への指導方法。
- ・ 進度が異なるクラス内での生徒理解。

(4)「1－(6)学習指導案通りに生徒が良く理解できる授業展開ができた。」

表10 学習指導案通りに生徒が良く理解できる授業展開ができた

	十分	やや十分	ふつう	少し不十分	不十分	合 計
回答数	16	33	32	31	2	114
%	14.0	28.9	28.1	27.2	1.8	100

表 10 は授業展開についての五択である。表 10 の授業展開においては、生徒が指導案通りに、「十分」と「やや十分」理解できたと回答した者は 42.9%、「ふつう」は 28.1%、「少し不十分」と「不十分」は 29%であった。

表 11 は、「十分」と「やや十分」の回答者 47 名の自由記述を類型化したものである。

表 11 の「学習指導案通りに生徒が良く理解できる授業展開ができた」と答えた回答の内訳は、「(4)指導教諭の指導・授業評価」を除いて、表 9 の「苦労した事項」の取組において、日々の授業の反省を

表 11 学習指導案通りに生徒が良く理解できる授業展開

内 訳	回答者	%
(1) 授業の展開	17	36.2
(2) 生徒の反応・取り組み	15	31.9
(3) 授業の時間配分	7	14.9
(4) 指導教諭の指導・授業評価	3	6.4
(5) 話し方、板書の仕方	2	4.3
(6) 実技指導・参考資料	2	4.3
(7) 教育機器の使用	1	2.1

積み重ねて授業の改善に取り組んだ結果でもある。
表 12 の「その他、授業を実習する上でどんな苦

労がありましたか」は、回答者 73 名の自由記述を類型化ものである。

表 12「その他の授業実習上の苦労」の 12 項目の内訳と回答事例の一部は、表 11 の研究授業結果をもたらした日々の授業活動を物語っている。

実習生は、美術に興味のない生徒に如何にして興味を持ってもらうか、どうしたら全員に声が届くか、後片付けを含む授業の時間配分をどうするか、宿題や持ち物を忘れてしまった生徒の指導をどうするかなど、さまざまな場面で取り組んでいる。授業は生き物であると言われる。生徒のつぶやきや想定外の問いかけに臨機応変に対応できる柔軟性

(回答事例)

<p>(1) 生徒を授業に集中させること</p> <p>・集中して授業を聞いてもらうことが大変でした。美術に興味のない生徒に、如何にして興味を持ってもらうかということも私の中のテーマだったので、なるべく多くの生徒に発言をしてもらうように努めました。</p> <p>(2) 生徒への声かけ・支援</p> <p>・実習一週間目はなかなか 生徒に横から話しかけるのが難しかった。また、指導の中心になったときに制作中に全体への声かけをしたり、個別に声かけの仕方が難しかった。</p> <p>(3) 話し方</p> <p>・声が小さいことを何度も指摘された。その為どうしたら全員に声が届くか考え、立つ位置や注意の喚起の仕方などを工夫した。</p> <p>(4) 臨機応変な授業対応</p> <p>・伝えたいことを時間内にいかに伝えるか、その上で生徒の反応を見て、時間配分を調整したりと臨機応変な授業進行も必要で苦労しました。</p> <p>(5) 説明不足</p> <p>・やはり、40 人もの人を前に授業するのは、とても緊張しました。途中、頭が真っ白になってしまうこともあり、説明の順序がバラバラになってしまったりしました。</p> <p>(6) 授業の時間配分</p> <p>・想像以上に 50 分の授業時間が短く、説明に時間をかけ過ぎてしまった。実践の方に使う時間がとてま少なくなってしまうたり、片付けが終わらなかったり、2 時間の配分にもものすごく苦労した。紙の上ではうまく行えても、実際に授業が始まると、予想外だったことも起こったりして対応するのに苦労した。</p> <p>(7) 先生との連携</p>

表 12 その他の授業実習上の苦労		
その他の苦労	回答数	%
(1) 生徒の授業への集中	13	17.8
(2) 生徒への声かけ・支援	12	16.4
(3) 話し方	10	13.7
(4) 臨機応変な授業対応	6	8.2
(5) 説明不足	6	8.2
(6) 授業の時間配分	5	6.8
(7) 先生との連携	5	6.8
(8) 美術室等の設備	3	4.1
(9) 情報機器の操作・板書	3	4.1
(10) 忘れ物の指導	2	2.7
(11) 評価	2	2.7
(12) その他	6	8.2

<p>・担当の先生の仕事が多く、私との時間が少なかったこと。少々、放任だったので、何をすればいいか分からなかったこと。</p> <p>(8) 美術室等の設備</p> <p>・美術室の水道の数が少なく片付けをする時間に思っていたより、時間がかかってしまったこと。</p> <p>(9) 板書</p> <p>・板書をする際、私は字の書き順がおかしいのでそこに配慮する必要があった。</p> <p>(10) 忘れ物の指導</p> <p>・宿題や持ち物を忘れてしまった生徒に臨機応変に対応し、授業を受けさせるという点に苦労した。</p> <p>(11) 評価</p> <p>・指導案作成にかなり苦労した。A 県は B 教育センターの評価規準の言葉をその授業に当てはまるように使わなければならない、不慣れな作業で何度も注意を受けた。</p> <p>(12) その他</p> <p>・実習日誌が非常に大変でした。次の日の授業の準備をしなければいけないのに、日誌に時間をとられてしまい、準備が十分にできない日があった。</p>
--

と専門性が必要とされることを実習生達は身を以て体感している。しかし、表 10「学習指導案通りに生徒が良く理解できる授業展開ができた」で、「不十分」と「やや不十分」の学生が約 30%を占めていた。教育実習事前指導の模擬授業や指導案作成の充実等の改善を含めて検討が要される。

2 学級指導関係・特別活動を中心に

教育実習のもう一つの中心は生徒指導である。朝は定刻までに出勤し、職員会議、朝の会、教科指導、特別活動指導、昼食・掃除時間、放課後の部活動など多くの教育活動を体験する。多様な体験を通して生徒たちと交流に努めて、生徒理解が促進されていく。生徒たちとの信頼関係が授業を支えていく力となっていく。

本章では、学級指導と特別活動を中心に実習生の生徒理解の実態把握を試みた。アンケート調査で行った質問項目の「2. 学級指導関係」の「(1)学級指導を行った主な内容は何ですか」、「(3)生徒とのコミュニケーションをとることができましたか」と、「3. 生徒

たちとの関わり」の「(1)学級活動で発見したこと」、「(2)休み時間に発見したこと」、「(3)給食時間・清掃時間に発見したこと」、「(4)学校行事等の場面で発見したこと」、「(5)部活動などの場面で発見したこと」、「その他の場面で発見したこと」について、五択質問の集計及び自由記述を類型化したものである。

(1)「2－(1)学級指導を行った主な内容は何ですか。」

表 13 は、学級指導について、100 名の学生回答を分類したものである。

実習で携わった主な学級活動は、学級(ホームルーム)活動、掃除活動、昼食活動、学校行事などである。昼食指導は中学校は 19 人、高等学校は 0 人である。掃除指導も高校よりは中学校が多い。学校行事は 25%で、体育祭 (12 人)、合唱コンクール (7 人)、文化祭 (6 人)の内訳である。実習校も実習生の参加を積極的に期待していると推察される。日誌への記入は、日々記録する学級日誌や生徒が記録した生活ノートなどへのコメントである。教科指導以外にクラス、個々の生徒との交流の媒体となっている。

表 13 学級指導内訳 (中学校 53 人、高等学校 47 人)

	中学	高校	合計	備 考
(1) 学級活動 (HR活動)	45	42	87	
(2) 掃除指導	24	17	41	
(3) 昼食指導	19	0	19	
(4) 学校行事	12	13	25	体育祭、合唱コンクール、文化祭
(5) 日誌への記入	6	3	9	
(6) 朝読書・朝学習	3	1	4	
(7) 学校見学 (進路指導)	1	1	2	
(8) その他		2	2	

(2)「2－(3)生徒とのコミュニケーションをとることができましたか。」

表 14 は、生徒とのコミュニケーションについて、118 名の学生回答を分類したものである。
実習前の大きな不安の一つであった生徒とのコ

ミュニケーションについて、「十分」と「やや十分」と回答した者は 51.7%の半数が回答している。一方、「少し不十分」と「不十分」と回答した者は 30.5%で全体の 3 割である。

表 14 生徒とのコミュニケーションをとることができましたか

	十分	やや十分	ふつう	少し不十分	不十分
回答数	24	37	21	31	5
%	20.3	31.4	17.8	26.3	4.2

表 15 は、生徒とのコミュニケーションの取り組みについて、67 名の学生回答を分類したものである。

実習生達がとったコミュニケーションの機会は、日々の学校生活の中での生徒との交流や会話、部活動や学校行事を通してが約 75%である。生徒たちへの対応として、名前を覚えること、積極的に声をかけること、笑顔で接し長所をほめ、ある時は叱る、そして学級日誌などを通しての交流が 22%である。その他には自己紹介プリントや生徒へのアンケー

表 15 コミュニケーションの取組

	回答数	%
(1) 生徒との交流、会話を通して	36	59.0
(2) 部活動、学校行事などを通して	10	16.4
(3) 生徒の名前、挨拶、声かけ	7	11.5
(4) 学級日誌などのコメント	4	6.6
(5) 笑顔、ほめる、叱る	2	3.3
(6) その他	2	3.3

トなどを作成してコミュニケーションを図っている。

(回答事例)

(1) 生徒との交流、会話を通して
・1～3 年が生徒アトリエに集まるので、授業中や授業後も一人一人と話すことができた。こちらから話しかけると返してくれるので、顔を見たら声をかけるようにした。
(2) 部活動、学校行事などを通して

・教室にいる時間は勿論、昼休みにはホールに足を運んで生徒と話をしたり、放課後の部活動や居残りの壁新聞作りを見たりした。生徒の下校時には、昇降口で挨拶をして見送った。

(3) 生徒の名前、挨拶、声かけ

・事前にクラスの席順や名簿を渡されていたこともあり、三日目ぐらいには全員の名前を把握できたため、スムーズなコミュニケーションをとることができました。

(4) 学級日誌などのコメント

・昼休みには生徒と一緒にご飯を食べたり、自由帳と称した交換日記など、様々な手段を考えて実践した。

(5) 笑顔、ほめる、叱る

・時には心を鬼にして、間違っことをした生徒には口調を強めて指導をしました。すると先生として扱ってくれる生徒が増えたような気がしました。あと、絵に興味を持ってくれたりしました。楽しさと厳しさを両立させたいです。

(3)「3－(1)学級活動で発見したこと」

表 16 は、学級活動で発見したことについて 78 名の回答を分類したものである。

表 16 (1)学級活動で発見したこと

発 見 事 項	回答者	%
(1) クラスの状況	24	30.8
(2) 生徒の実態・理解	24	30.8
(3) コミュニケーション取り方	15	19.2
(4) 生徒同士の関係	7	9.0
(5) 生徒の心身の状況	4	5.1
(6) 学級活動指導の在り方	4	5.1

日々の学級生活の中で、生徒とのコミュニケーションの取り方を模索しながら、「(2)生徒の実態・理解」、「(4)生徒同士の関係」、「(5)生徒の心身の状況」などの生徒理解についての発見が 64.1%を占めている。
クラス状況の把握に繋がる発見は、「(1)クラスの状況」の 30.8%である。

(回答事例)

(1) クラスの状況
・クラスごとに色がぜんぜん違うこと。
・クラスの学級委員長を周りがフォローしながら円滑に進めていた。一人一人が役割を持っていたことが印象深かった。
(2) 生徒の実態・理解
・積極的に発言する生徒や笑わせる生徒、注意したり注目を集めたりする生徒、それぞれの生徒にクラスの中での役割があるように思えた。
(3) コミュニケーションの取り方
・自分が一方的に話す場でもことばのキャッチボールをするようにしゃべり、はっきりと話すことでより相手に話を聞いてもらいやすくなる。
(4) 生徒同士の関係
・どの生徒が誰と仲がよいのか、喧嘩をしているのか、教室の生徒の様子は常に変化するということを実感しました。

<p>(5) 生徒の心身の状況</p> <p>・朝の短い時間の中で、体調の悪そうな生徒や心に悩みを抱えていそうな生徒に気付いてあげるとい担 任の仕事は、本当に大切で、難しいものであることが分かった。</p> <p>(6) 学級活動指導の在り方</p> <p>・基本的には生徒主体で動き、朝礼等は先生が来る前に終わっていることが多いので、確認 事項や伝達 事項の話をし、そこに日常で発見したことなどの会話を入れる。</p>
--

(4)「3-(2)休み時間に発見したこと」

表 17 は、学級活動で発見したことについて 70 名の回答を分類したものである。

「休み時間に発見したこと」の内訳で「(5)休み時間の短さ」では教室の移動、授業準備等でなかなか休憩がとれなかった者が多く見られる。短い時間ではあるが、コミュニケーションを通して、生徒の様々な過ごし方や行動を観察していることが分かる。休み

(回答事例)

<p>(1) コミュニケーションを通して</p> <p>・担任の先生などよりも年齢が近いということもあり、身近で他愛のない話、好きなものの話などをして、また違ったアプローチでコミュニケーションがとれた。</p> <p>(2) 生徒の友人関係と活動</p> <p>・他クラスの生徒との関係。休み時間となると、他クラスの生徒とも交流を始めるので、誰と仲がいいのか、誰がインドア・アウトドア派なのかとすることが分かりました。</p> <p>(3) 多様な過ごし方</p> <p>・本当に短い時間を使って、生徒たちは身体を動かしたり、本を読んだり、友達と話をしたりと楽しい時間を過ごしていました。</p> <p>(4) 生徒の状況・理解</p> <p>・生徒達が今どんな悩みがあるのか、どんなものが好きなのかを把握するのに休み時間が最適でした。</p> <p>(5) 休み時間の短さ</p> <p>・5 分しか休憩がないため、ほぼ何もできない。</p> <p>・休み時間が大変短いことに気づいた。生徒の頃は教室に移動して友人と話す時間があったが、先生の立場では余りにせわしなかった。</p> <p>(6) スマートフォン</p> <p>・ずっとスマホをいじっている生徒と 2 ～ 3 人で集まる生徒、5 ～ 6 人で集まる生徒などそれぞれのコミュニティーにわかれていました。</p>

表 17 休み時間に発見したこと

休み時間での発見	回答者	%
(1) コミュニケーションを通して	17	24.3
(2) 生徒の友人関係と活動	12	17.1
(3) 多様な過ごし方	10	14.3
(4) 生徒の状況・理解	11	15.7
(5) 休み時間の短さ	14	21.4
(6) スマートフォンなど	5	7.2

時間のスマートフォン利用 (7.2%) は高等学校においてである。

(5)「3－(3)給食時間・清掃時間に発見したこと」

表 18 は、給食時間・清掃時間に発見したことについて 85 名の回答を分類したものである。

表 18 給食時間・清掃時間に発見したこと

発見・指導領域	回答者	%
(1) 掃除の取り組み	24	28.2
(2) 掃除・昼食指導の方法	20	23.5
(3) コミュニケーション	10	11.8
(4) 生徒の状況・理解	10	11.8
(5) 昼食時の様子	9	10.6
(6) 昼食時間の短さ	7	8.2
(7) 生徒同士の関係	4	4.7
(8) その他	1	1.2

(回答事例)

<p>(1) 掃除の取り組み</p> <p>・生徒から私に掃除のルールなどを教えてもらうことがあった。掃除でも積極的に動いていた。</p> <p>・なかなか掃除を進んでできない生徒が多く、何度も注意しました。</p> <p>(2) 掃除・昼食指導</p> <p>・掃除をさぼる生徒、掃除の当番であることを忘れる生徒がいて、それに対する指導方法がそれぞれ違うことに気付いた。</p> <p>・掃除時間では、やっている生徒とやらない生徒が出てくるので、そこをまとめ上げることが難しかった。</p> <p>(3) コミュニケーション</p> <p>・昼食の時間は、毎日違う生徒の輪に交ざり、趣味の話や何気ない会話をすることで、クラスの様子や人間関係が見える時間でした。</p> <p>・普段は大人しく無口そうで、なかなか話し掛けられずにいた生徒が、ゴミ捨てに進んで行ってくれたり、周りとのコミュニケーションを取りながら机を運んだりする中で、声をかけてくれて嬉しかった。様々なコミュニケーションの取り方があることを学んだ。</p> <p>(4) 生徒の状況・理解</p> <p>・生徒の所属している部活についてや、掃除時の積極性。普段ふざけてばかりいるような生徒が掃除をしっかりとしている所を見て、意外な一面を知ることが出来ました。</p> <p>(5) 昼食時の様子</p> <p>・給食時間が短く、ゆっくりと食事が出来るわけではないが、楽しそうだった。掃除時間は無言掃除が徹底されている。</p> <p>(6) 昼食時間の短さ</p> <p>・昼食は 10 分で済ませ、昼休みは先生へ質問にいく生徒も多く、準備室に列ができていた。本当に立派</p>
--

表 18 の「給食時間・清掃時間に発見したこと」

での給食時間は、昼食時間を指すものである。最も多い回答は、「(1) 掃除の取り組み」の積極的・消極的に取り組む生徒についてであった。二番目に多かった「(2)掃除・昼食指導の方法」では、掃除指導の方がほとんどを占めていた。実習生にとって掃除指導は重点指導の一つといえる。「(6)昼食時間の短さ」は 8.2%である。学校生活の多忙さがうかがえる。一方、短時間ではあるが、「(4)生徒の状況・理解」(11.8%)、「(5)昼食時の様子」(10.6%)、「(7)生徒同士の関係」(4.7%)において、生徒との触れあいの中で生徒の意外な側面を発見する貴重な機会となっている。

だと思った。

・昼食の時間がとても短く、食べるだけで必死だった。生徒も中には食べ終わることができずに昼休みもずっと食べていたりした。

(7) 生徒同士の関係

・普段は皆仲良くしているが、昼食時には決まったグループと机を寄せ合って、食べているなど授業では見ることが出来ない面が見られた。

(6)「3－(4) 学校行事等の場面で発見したこと」

表 19 は、「学校行事等の場面で発見したこと」について、56 名の回答を分類したものである。

表 19 学校行事等の場面で発見したこと

発見場面等	回答者	%
(1) 体育祭関係	21	37.5
(2) 合唱祭・文化祭関係	8	14.3
(3) 生徒の意外性発見関係	8	14.3
(4) 校外学習・修学旅行・遠足関係	7	12.5
(5) 生徒集会関係	6	10.7
(6) 安全管理の指導	4	7.1
(7) 教師の支援	2	3.6

実習中に関わった「学校行事等の場面で発見したこと」の内訳から、実習生が参加した主な行事は、「(1)体育祭関係」と「(2)合唱祭・文化祭関係」が中心であるといえる。「(3)生徒の意外性発見関係」は両者のいずれかに入っているが場面が明記されていないために分類したもので、これを加味すると約 66%を占める。実習生にも学校行事に参加する機会が多く設定されている。体育祭・合唱祭を盛り上げるためにはクラスの団結が不可欠とされている。生徒たちが主役となる、生徒のための行事である。実習生はクラスがまとまるための緩衝材・接着剤のような存在として、個々の生徒に関わっている。教科指導では見ることができない、生徒の姿に接する機会でもある。

(回答事例)

(1) 体育祭関係

・普段は目に見えにくいクラスの結束の質が数量（大縄飛びの回数など）で出てくる瞬間があり、教師と生徒も改めて様々なことを考えさせられるターニングポイントになっていた。

(2) 合唱祭・文化祭関係

・合唱コンクールでパートリーダーと他の生徒との温度差があったが、だんだんとクラスがまとまり、みんな一生懸命に取り組むようになった。

(3) 生徒の意外性発見関係

・いつも授業や HR では見ることの出来ない生徒の様子や表情を見ることが出来ました。

(4) 生徒集会関係

・生徒会選挙で全校生徒が体育館に集まったとき、最初こそ騒がしいものの、先生方が声を張り上げて注意したり指導することもなく、自分たちから静かにして環境作りに協力していて、最初から何でも注意をすれば良いというわけではないことが分かった。

(5) 課外活動・校外学習関係

・1年生の社会科見学の発表や、2年生の課外活動の期間だったので、生徒が楽しそうにしている姿を見

ることが出来ました。

(6) 安全管理の指導

・火災訓練の際、指導する側が緊張感を持った話し方をすることで、生徒の表情等に変化が見られた。

(7) 修学旅行・遠足関係

・3年生、修学旅行前日はやはり、浮き足立っていた。学活の時間のしおりの読み合わせはとても大切で
あると感じた。

(8) 教師の支援

・合唱コンクールの練習、やはり先生の力はすごい。まとめ役が頑張っても、団結力が大切。私が気付かなかった些細な変化を担当の先生は見抜けた。

(7)「3－(5) 部活動などの場面で発見したこと」

表 20 は、「部活動などの場面で発見したこと」について、52 名の自由記述回答を分類したものである。

表 20 部活動などの場面で発見したこと

発 見 内 容	回答者	%
(1) 生き生きとした・意欲的な姿	21	40.4
(2) 部活動の雰囲気、状況	12	23.1
(3) 生徒との関係性	11	21.2
(4) 生徒へのアドバイス	5	9.6
(5) その他	3	5.7

部活動の質問に対する自由記述の回答は高等学校実習生が多くを占めていた。活動は、生徒の心

身の健全な育成を図る上で重要な役割を果たしている。実習生に関わったクラブは美術部が圧倒的に多い。教科指導では見られない「(1)生き生きとした・意欲的な姿」の発見が 40.4%で最も多い。「(3)生徒との関係性」(21.2%) は、部活動によって HR クラス以外や教科指導以外の生徒と接することができた割合である。「(2)部活動の雰囲気、状況」(23.1%) では部活動の取り組みの雰囲気や居場所としての部の存在を発見している。「(4)生徒へのアドバイス」(9.6%) では美術の先輩として大学進学のアドバイスを行うなど生徒にとっても貴重な機会であることがうかがえる。

(回答事例)

(1) 生き生きとした・意欲的な姿

・絵を描くというより話すことに夢中になる生徒が多かった。それでもいいと思った。生徒に受験絵画について相談を受けたり、時には個人的な生活の話を聞いたり、部活の時間が一番生徒の本当の姿が見られた。

(2) 部活動の雰囲気、状況

・担当学年でない生徒と交流を持ついい機会だった。美術部員の生徒がスケッチブックの絵を見せてくれた。部活動においても、生徒の可能性を認めて引き出す教員の仕事は続いているのだと改めて感じた。

(3) 生徒との関係性

・バトミントン部。私が所属していた頃よりも上下関係が緩くなっていた。おかしい上下関係はなくなった。雰囲気も少し緩くなっていた。

・美術部で美大に行こうか悩んでいる生徒がいて、ちゃんと進路のことを考えているのだと改めて感心し、相談にのっていろいろ話しました。

(4) 生徒へのアドバイス

・美術部で美大に行こうか悩んでいる生徒がいて、ちゃんと進路のことを考えているのだと改めて感心し、相談にのっている話しました。

(8)「3－(6) その他の場面で発見したこと」

表 21 は、「その他の場面で発見したこと」について、54 名の回答を類型化してまとめたものである。

表 21 その他の場面で発見したこと

発見場面	回答者数	%
(1) 生徒からの挨拶、声かけ	12	22.2
(2) 生徒たちからの対応や反応	8	14.8
(3) 職員室、教師の勤務姿勢	8	14.8
(4) 生徒の相談・アドバイス	7	13.0
(5) 問題行動等と対応	6	11.1
(6) 登下校時	4	7.4
(7) 生徒支援	3	5.6
(8) 子女教育	2	3.7
(9) 特別支援学級との交流	2	3.7
(10) その他	2	3.7

表 21 から、教科指導、生徒指導、学校行事などの他に様々な場面で生徒との関わりや発見をしている。今までの質問事項には見られなかったものとして、「(1)生徒からの挨拶、声かけ」(22.2%)、「(3)職員室、教師の勤務姿勢」(14.8%)、「(5)問題行動等の対応」(11.1%)、「(6)登下校時」(7.45%)、「(8)子女教育」(3.7%)、「(9)特別支援学級との交流」(3.7%)があげられる。最近、挨拶の励行に取り組んでいる学校が多く見受けられる。大学生活において制作中心の本学生達は、生徒から「おはようございます」などの声かけをととても新鮮に受けとめている。

(回答事例)

(1) 生徒からの挨拶、声かけ

・どの生徒も挨拶がしっかりとしていて、私も元気をもらうし、その挨拶があるからいい雰囲気といい環境があると思う。

(2) 生徒たちからの対応や反応

・あまり反応を強く示さない生徒でも、じっくり毎回話しかけ続けると、だんだんと表情が変わっていくのが分かった。

(3) 職員室、教師の勤務姿勢

・いじめや生徒間での差別がなく、いじめに発展しそうな行動は教員の素早い対応と朝礼(教員室)でしっかりと打ち合わせて対応していた。

・生徒たちの知らないところで、先生方がどれだけ生徒達のことを考え、思い、悩み、話し合っているかを三週間の短い期間では、その一部分しか見れていないが、痛いほど強く感じる事ができた。

(4) 生徒の相談・アドバイス

・進路選択の時期で悩み相談を受けることも幾度もあり、生徒の真っ直ぐな気持ちに「こちらも真剣に答えなくては」という気持ちにさせてくれたこと。

(5) 問題行動等と対応

・保健室の先生を通して、学校には想像以上に多種多様な生徒たちがいることがわかった。

(6) 登下校時

・帰り道に生徒と一緒に駅まで歩くことが多く、やはり自分の話をたくさんしてくれるので、生徒にとって自分がさらけ出せる場面が必要なんだと感じた。

(7) 生徒支援

・あまり反応を強く示さない生徒でも、じっくり毎回話しかけ続けると、だんだんと表情が変わっていくのが分かった。

(8) 子女教育

・外国籍の生徒が多く会話が大変でしたが、日本語が分かる生徒が通訳してくれたり、本人自身も日本語を話そうと努力しており、感動しました。

(9) 特別支援学級との交流

・特別支援学級に対する全校生徒の理解。当たり前と言えばそれまでだが、雰囲気がとてもよくて驚いた。

(9)「4. 先生たちとの関わりについて」

教育実習は教科指導や生徒指導のみならず、教員としての職務・服務についての理解を深めることが求められる。

本稿では、教科担任、学級担任の教員との関係性を持ったのか、先生方からの学びはどのようなものであったかについて意識調査を行った。アンケート調査で行った質問項目の「(1)先生方とのコミュニケーションがうまくとれましたか」、「(2)先生方から教

わったこと、学んだこと」について、五択質問の集計及び自由記述を類型化した。併せて、教科担任と学級担任の回答事例を採りあげた。

「4－(1) 先生方とのコミュニケーションがうまくとれましたか。」

表 22 は、「先生方とのコミュニケーションがうまくとれましたか」について、112 名の回答を類型化してまとめたものである。

表 22 先生方とのコミュニケーションがうまくとれましたか

	十分	やや十分	ふつう	少し不十分	不十分
回答数	25	35	36	12	4
%	22.3	31.3	32.1	10.7	3.6

先生方とのコミュニケーションがとれた回答割合は、「十分」と「やや十分」の 53.6%で、「ふつう」は 32.1%、「少し不十分」と「不十分」の回答割合は 14.3%であった。

「少し不十分」と「不十分」の主な理由として、「教科や学級担当以外の先生と接する機会がとれなかった」、「美術担任の先生ほど、学級担任の先生と関わる事ができなかった」、「先生が会議等で多忙なために連絡が密にとれなかった」、「先生との関係がうまくいかなかった」、などがあげられている。

(2)先生方から教わったこと、学んだこと。

実習生が指導を受けた先生は、クラス担当の先生の指導を受けなければならない。表 23 は教科担任、学級担任に対する指導についての回答を類型化してまとめたものである。自由記述回答は、教科担任に対しては 76 名、学級担任に対しては 45 名である。

教科担任からの学びでは、「(1)授業について」(32.9%)、「(2)教育に対する取組・姿勢など」(19.7%)、

表 23 先生方からの学び

教科担任	回答者	%	学級担任	回答者	%
(1) 授業について	25	32.9	(1) 生徒指導・生徒理解	22	48.9
(2) 教育に対する取組・姿勢など	15	19.7	(2) 授業について	7	15.6
(3) 伝え方、話し方、板書の仕方	10	13.2	(3) 教育に対する取組・姿勢など	6	13.3
(4) 生徒指導・生徒理解	10	13.2	(4) 伝え方、話し方、板書の仕方	4	8.9
(5) 美術教科の意義	7	9.2	(5) 授業準備・指導案作成など	3	6.7
(6) 授業準備・指導案作成など	6	7.9	(6) 環境整備・安全管理	2	4.4
(7) 環境整備・安全管理	3	3.9	(7) 美術教科の意義	1	2.2
合 計	76	100.0	合 計	45	100.0

「(3)伝え方、話し方、板書の仕方」(13.2%) が約 66%を占めている。

教科担任から、授業準備においては教材研究、指導案の作成、参考資料作成、教育機器の準備、授業時における発声、板書、授業展開のポイント、安全確認、評価法などの様々な教科指導を受けている。これらの教科指導を通して、「(5)美術教科の意義」(9.2%) では美術教科の存在意義や思春期の生徒たちの成長に関わる芸術の重要性を再確認している。実習生にとって教科教育の在り方の再認識のみならず、各自の専門性においても今後の制作

活動等示唆に富む教示である。

学級担任からの学びでは、「(1)生徒指導・生徒理解」(48.9%)、「(2)授業について」(15.6%)、「(3)教育に対する取り組み・姿勢など」(13.3%) で、生徒指導が約 50%を占めている。学級担任から、学級活動・ホームルーム活動では SHR や LHR、昼食・掃除時間、学校行事を通して、自己肯定感を育む居場所としてのクラスづくりの指導を受けるとともに、生徒と向き合う姿を体感している。「(2)授業について」は他教科担当の教師からは授業の在り方についての学びが多く見られる。

教科担任（回答事例）

(1) 授業
・スムーズな授業の展開の仕方や生徒とのコミュニケーション、教師という職業についてなど沢山のことを教えていただきました。
・生徒の作品への思いを大切にしつつ、一人一人の手腕を見極めて課題を出すなど、生徒一人一人をきちんと見ることを教わりました
(2)教育に対する取組・姿勢など
・美術という教科が中学生にとってどのような存在になるか、どんなことを感じてほしいか、どんな力を身につけてほしいか、とことん考えて生徒に向き合わないと生徒もついてこない。
(3) 伝え方、話し方、板書の仕方
・板書の字の大きさ（大きすぎず、小さすぎず）。具体的なものを出して指示すること。発見させること。→面白いにつながる。
・生徒の前で話す際に注意することや、注目させるときに効果のある言葉、指導案の細かいルールなど、多くのことを学んだ。

(4) 生徒の指導・生徒理解

・生徒の成長過程において、思春期である生徒の態度や個人個人でもその時の心理をはかることなど、つぶさに全体を観察することが大事。

(5) 美術教科の意義

・美術という科目を自由で楽しいものとして、生徒に提供するだけではなく、産みの苦しみなどの精神的にも生徒が成長できる指導が大切であること。

・美術を通して何を育みたいか、その根本をしっかりと持つこと。

(6) 授業準備・指導案作成など

・授業の組み立て方や指導案を書く上での表現、美術の授業の進め方など沢山教えていただきました。

(7) 環境整備・安全管理

・生徒一人一人をよく見て、生徒が安全に楽しく授業ができることが、なによりも一番大切で、そのための準備をコツコツと行うことが重要である

・「美術」においては忘れがちだけれども安全を第一に、また生徒が“熱中できる時間を保証してあげる”ことも教員の役割だということ。

学級担任（回答事例）

(1) 生徒の指導・生徒理解
・生徒一人一人に関心を持ち、どんなことに興味を持っているか、悩んでいるかなど把握することでクラスがまとまるように指導することを学びました。
・素行の悪い生徒ほど積極的に話しかける。関わることをあきらめてはいけない。どんどん悪い方向に行くのを集団の役割を与えることで防げるかもしれない
(2) 授業
・先生からすると同じ内容の授業だとしても、生徒からすれば一生に一度の学びの場であるとを教えていただき、私も完璧を目指して授業をした。
・授業の三割できていたら、七割できていなくても三割を褒めてあげる。そうするとやる気がなかった生徒がやる気を出す。
(3) 教育に対する取組・姿勢など
・毎日が体力勝負！先生は朝から晩まで、すごく忙しい。タフさが必要な職業だと思いました。いつも元気な先生からは勇気をもらえます。
・笑顔で教える先生の生徒は皆笑顔だということ。
(4) 伝え方、話し方
・「こちらが不安に思っていることを生徒は敏感に感じ取るので、堂々と自信を持って話すことが大事。間違っていたら後で謝れば大丈夫だから」、といわれた。
(5) 授業準備・指導案作成など
・生徒との接し方や教材選びのポイント、生徒への思い。

・休日と一緒に教材研究を手伝って下さったり、教師としての姿勢を学びました。
(6) 環境整備・安全管理
・生徒一人一人をよく見て、生徒が安全に楽しく授業ができることが、なによりも一番大切で、そのための準備をコツコツと行うことが重要である。
(7) 美術教科の意義
・美術はとても自由な教科なので、だからこそクラスが乱れないようにしっかりと指導しなければいけない。

C. 教育実習後の質問

教育実習は、学生にとっては、自分の教員としての適性や能力を確かめ、教員への方向を選択するか否かを熟考する機会でもある。教育実習への不安感と期待を抱きながら実習をむかえ、生徒たちとの交流を通してやり終えた達成感と充実感が多く

表 24 教職志望意識の変化

	a	b	c	d	e
回答数	25	35	36	12	4
%	22.3	31.3	32.1	10.7	3.6

「a. 教員志望だったが、一層教員になりたくなった。」が 22.3%、「b. 教員志望ではなかったが、教員になりたくなった。」が 31.3%、「c. 教員志望ではなかったが、教員もよいなと思い始めた。」が 32.1%である。教育実習を通して、教職に魅力を見いだした学生が 63.5%であった。「a. 教員志望だったが、一層教員になりたくなった。」を含むと 85.7%を占めている。一方、「d. 教員志望だったが、教員になりたくなかった」を選択した、つまり教職への意欲を失ったと回答した者が 10.7%である。決して低い割合ではない。「e. 教員志望ではなかったが、今もその気持ちに変わりはない」の 3.6%を加えると教職志望に消極的な学生が 14.3%である。実習での教科指導や生徒指導及び生徒とのコミュニケーションなどにおいて負の体験や教員としての適性に合わないと感じたことに因るのではないかと推察される。負の要因については今後の課題である。また、最初から教師志望でなかった学生の存在も明らかになっ

の実習生の貴重な体験となっている。

1 教職志望意識の変化

表 24 は、「教職志望意識の変化」についての 118 名の回答集計である。

た。両者を含めて教職課程における事前指導の課題でもあり、改善策を講じる必要がある。

2「教育実習を通してよかったこと、嬉しかったことはどんなことですか。」

表 25 は、「2. 教育実習を通してよかったこと、嬉しかったことはどんなことですか。」について、92 名の自由記述回答を類型化したものである。

表 25 教育実習を通してよかったこと

項 目	回答数	%
(1) コミュニケーション・信頼関係	32	34.8
(2) 意欲的な生徒の反応・取り組み	24	26.1
(3) 生徒たちに美術の楽しさを伝えられたこと	9	9.8
(4) 先生！と呼ばれたこと	6	6.5
(5) 先生方の支援	6	6.5
(6) 自己発見	8	8.7
(7) 教育現場体験ができたこと	5	5.4
(8) 実習をやり終えたこと	2	2.2

主な回答は、「(1)コミュニケーション・信頼関係」(34.8%) は生徒理解関係、「(2)意欲的な生徒の反応・取り組み」(26.1%) と「(3)生徒たちに美術の楽しさを伝えられたこと」(9.8%) は授業実践についてである。学生にとって、実習前の二大不安感であった授業実践不安と生徒関係不安を克服して、意欲的に取り組んだ実習となったことがうかがえる。「(4)先生！と呼ばれたこと」(6.5%) は生徒から「先生」と呼ばれて

いいのか戸惑いながらも初々しい実習生の姿を表している。「(7)教育現場体験ができたこと」(5.4%) は、教育実習を通して教員の仕事や学級運営、生徒の実態について総合的に理解し体感したことである。そして、「(5)先生方の支援」(6.5%) や生徒たちとの交流の中で、「(6)自己発見」(8.7%) の機会ともなった「(8)実習をやり終えたこと」(2.2%) の充実感が、これらの回答に反映されている。

(回答事例)(a ～ e の記号は、「1. 教職志望意識の変化」の質問記号)

(1) コミュニケーション・信頼関係	
・生徒と話しているともっと勉強しよう、成長しようとやる気が湧いてくる。下手なアドバイスや適当な相づちはできないので、慎重になりました。自分自身も成長するきっかけをもらえた三週間でした	b
・HR の生徒達とコミュニケーションをとり、良い関係を築けたこと。最後の日に色紙と花束を貰ったこと。全学年だが、特に 3 年生の美大受験をする生徒に美術の面白さを伝え、それに生徒も興味を持ってくれたこと。受験指導を積極的にして欲しいと生徒に頼まれたこと。	c
(2) 意欲的な生徒の反応・取り組み	
・教育実習を通しての目標は「美術に対して少しでも興味を持って貰う」ことだったので苦手そうな生徒に話しかけコミュニケーションをとる中で、美術について知ってもらった点、納得して貰えた部分があったのはすごく嬉しかった。	c
・新しい感性に出会えた気がする。嬉しかったことは授業を楽しんでくれた生徒が多く、分かりづらい説明にもちゃんと理解しようとしてくれたり、質問をしてくれたりしたこと。	e
(3) 生徒たちに美術の楽しさを伝えられた	
・教育実習を通しての目標は「美術に対して少しでも興味を持って貰う」ことだったので苦手そうな生徒に話しかけコミュニケーションをとる中で、美術について知って貰った点、納得して貰えた部分があったのはすごく嬉しかった。	c
・生徒の「わかった!」というアクション。美術という分かりづらい教科で「納得」してもらったときの嬉しさはたまりません。	c
(4)先生！と呼ばれたこと	
・「先生!先生!」と声を沢山かけてくれたり、絵を描く手を動かさずにいた生徒にアドバイスをすると、ふと描き出して、楽しい姿を見たとき素直に嬉しかった。	e
(5) 先生方の支援	
・生徒としてでは分からなかった先生方の気持ちに触れられたことが良い経験でした。本当に生徒のことを第一に考え、生徒一人一人と向き合うこと、安全で楽しく過ごせるように気配りをしていると改めて実感しました。	e
(6) 自己発見	

・ 未熟さを改めて実感することが出来、より一層努力していこうと思うことが出来ました。生徒に慕われたことが嬉しかったです。	c
(7) 教育現場体験ができたこと	
・ 「現場」 に立たないと分からないことだらけだった。様々な場面で自分の無力さや知識の偏りや「伝える」ということの難しさを肌で感じ、自分に足りないものを具体的に知ることができた。生徒達が自分の顔を見て笑顔で名前を呼び駆け寄ってくれた時に大きな幸せを感じた。	a
(8) 実習をやり終えたこと	
・ 体力面でも精神面でも鍛えられた。頑張っている姿は先生だけでなく、生徒も見えてくれたこと。生徒と過ごす時間が楽しかった。人前で話す機会だらけで、少しずつ堂々と話せるようになった。やりきったという達成感から自信がついた。	c
・ 自信をもらえたこと。「美術の授業が面白かった!」と言ってもらえたこと。授業そしてクラス、部活の生徒、学級指導の生徒たちに出会えたこと。“一応免許をとっておくか”という気持ちでしたが、実習を終え、今ばいつかは先生になっている気がする”と言う気持ちです。本当に素晴らしい経験をさせてもらえた。	c

表 26 は、「3. これだけは準備しておけばよかった、またはこのことについて勉強しておけばよかったと思うこと」について、90 名の自由記述回答を類型化したものである。

「(1)指導案作成」～「(7)専門外の美術領域」までの約 92%が教科指導についてである。内訳内容は、実習校との事前の打ち合わせ、指導案作成、授業時における参考資料作成そして授業実践などである。「(1)指導案作成」が 20%で最多であるが、教育実習校の指導教諭との十分な打ち合わせなどができなかったと回答した学生が多くみられた。事前指導の段階で「(5)模擬授業」(7.8%)を多く体験する機会の必要性を訴えている。また、地域や実習校によって大学で指導した様式と異なる場合もあり、臨機応変に対応することが要される。回答事例にもあるように指導案作成や模擬授業などを含めた教職課程における事前指導の充実改善が必要とされている。

(回答事例)

(1) 指導案作成

表 26 これだけは準備しておけばよかった

項 目	回答数	%
(1) 指導案作成	18	20.0
(2) 実習時の授業諸準備	16	17.8
(3) 事前準備・打ち合わせ	14	15.6
(4) 美術教科に関する知識	11	12.2
(5) 模擬授業	7	7.8
(6) 伝え方、話し方	7	7.8
(7) 専門外の美術領域	6	6.7
(8) 自己紹介	4	4.4
(9) 生徒との関わり方	6	6.7
(10) その他	1	1.1

実習数ヶ月前から実習校の指導教諭と何度も打ち合わせを行って臨む学生もいる。

- ・ 指導案を実習前から作り、なれておけば良かったと思いました。
- ・ 指導案を実習に入ってから作り始めたので、早めに準備しておくべきだった。指導案が地域や学校によって異なったルールがあることを、しっかり確認しておくべきだった。事前に準備していた指導案は殆ど書き直した。
- ・ 事前に研究授業をどの内容でやるのか決めておけば良かった。プリント作成を前もってしておけば実習中がもっと楽だった。指導案が全然書けなかった。もっと指導案を書くための授業をして欲しいと思った。
- ・ 道德の時間について、もう少し資料や研究が必要だったと思いました。

(2)実習時の授業諸準備

- ・ 自分の専門分野の授業なので伝えることに対しての熱意はあったのだが、「伝え方」に対しての準備不足や自分が思っている以上に分かり易くしないと伝わらなかった部分があった。「授業をすること」に対しての勉強や準備が当たり前だが、必要だと思った。
- ・ 中学生にも分かるように、作品を説明できれば尚よかった。中学生の話題や雰囲気調べてみればよかった。

(3)事前準備・打ち合わせ

- ・ もう少し早めに高校に行って、何をするか、先生と話しておくべきだった。
- ・ 実習が始まると毎日本当に時間がないので、やはり事前の準備はもっと詰めておくべきだったと思う。また、不安になりすぎて“こうなったらどうしよう”などというネガティブ過ぎる思考はいらなかったと思う。

(4) 美術に関する知識

- ・ 美術史や作家について、一般的常識は堂々と教えることができるくらいには勉強すればよかった。

(5) 模擬授業

- ・ 模擬授業はしておけば良かった。色彩についてもっと勉強をしておけば良かった。後もっと、人の前で授業をやることになれておく準備をしておくべきでした。
- ・ 可能ならば、事前に模擬授業をしてもらえるのかを聞いて、練習させてもらえばよかったと思った。

(6) 伝え方、話し方、板書

- ・ 指導案に使うような言葉。学級の生徒たちに伝える言葉。
- ・ 字が下手な人間にとってストレスがすごかった。先生からも生徒からも指摘されます。

(7) 専門外の美術領域

- ・ 担当する授業内容を始まってから聞いて、あまり得意ではない立体造形も含まれていた上に、研究授業ではプリントなどの作成に時間を要した。一ヶ月若しくは二週間ほど前に詳細な授業内容を聞いておけば良かったと思った。

(8) 自己紹介

- ・ 自己紹介など、もっと時間をとればよかったと思いました。

(9) 生徒との関わり方

- ・ 自分と生徒の関係性をしっかり考えてから臨んだ方がよかったかなと思う。関わり方に 2 週間ほど苦しんだ。

4.「教育実習を通して厳しかったこと、課題点はどんなことですか。」

表 27 は、「4. 教育実習を通して厳しかったこと、課題点」について、72 名の自由記述回答を類型化したものである。

表27 教育実習を通して厳しかったこと、課題点

項 目	回答数	%
(1) 教科指導	17	23.6
(2) 生徒との関わり方	14	19.4
(3) 伝え方、話し方、板書	8	11.1
(4) 教師の多忙さ、仕事量	8	11.1
(5) 体調管理	7	9.7
(6) コミュニケーション能力	7	9.7
(7) 指導案作成	4	5.6
(8) 実習時の授業諸準備	4	5.6
(9) その他	3	4.2

「教育実習を通して厳しかったこと、課題点はどんなことですか」の質問に対して、主に授業力関係、生徒理解関係、教育実習活動の三観点からの回答が多く出された。

授業力関係は、「(1)教科指導」(23.6%)、「(3)伝え方、話し方、板書」(11.1%)、(7)指導案作成(5.6%)、「(8)実習時の授業諸準備」(5.6%)の合計約 45.9%である。美術に興味のない生徒や集中しない生徒を如何に引きつけるか、板書や声のかけ方や後片付けを含む授業の時間配分をどうするか、宿題や持ち物を忘れてしまった生徒の指導をどうするかなど、さまざまな場面で取り組みで直面した場面課題である。

生徒理解関係は「(2)生徒との関わり方」が

(回答事例)

(1) 教科指導
・実技でいかに生徒のモチベーションを下げず指摘するところはきちんと指摘するか。興味のない子にどうやって関心を持たせるか。
・美術の授業は他の教科より具体的な回答や正解が少ない分、いかに生徒に分かり易く説明するかのをさじ加減が難しく日々苦労した。個別にアドバイスや指導はやりやすかったのだが、全体を通しての指導が思っ

(19.4%)で、「毅然とした態度で注意ができなかった」とする回答が多くみられた。生徒指導は、教育活動において生徒の成長を促し、自ら現在及び未来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すという意義を持っている。自己指導力を育てるために、「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育てる」「自己決定の場を与える」という機能を生かしていかなければならない。⁽³⁾危険なことや周囲に迷惑をかける行為に対して、毅然とした態度で臨む必要がある。その為には日頃から生徒とのコミュニケーションを通して信頼関係がなければ生徒は納得しない。生徒の自尊感情を傷つけ、自己肯定感を育ませることができなくなってしまうのではないかという戸惑いが回答からうかがえる。短い実習期間においては「ほめること」よりも「注意する(叱る)」ことの困難さを実感した実習生が多い。

教育実習活動は、「(4)教師の多忙さ、仕事量」(11.1%)、「(5)体調管理」(9.7%)である。実習生は数週間にわたって早朝から放課後まで、教材研究や授業準備、教科指導や生徒指導、その日の反省や実習日誌の記録など、多忙な日々を過ごしている。自己の実習体験を通して、教科担任や学級担任の多様な業務活動に触れて改めて教員の多忙化を体感する機会でもある。体調管理においては、ある学生は、「毎日朝早く夜遅く午前 7 時～午後 10 時頃まで、休日も準備でつぶれる。帰ってからも準備で、毎日四時間睡眠だった。」と述べている。教員の多忙さをこなして行くには、何よりも体力を保つ心身の健康管理の重要性を課題としている。

た以上に難しく他の教科の授業を見るなどして研究していた。
(2) 生徒との関わり方
・毅然とした対応がとれない、叱れない、先生によっておっしゃることが違うこと、生徒との距離感。
・生徒に対して毅然とした態度で注意することが出来ずに困ってしまった。注意するにも言葉を選んだり、ダメなことはダメと止めさせるのが課題。
(3) 伝え方、話し方
・基本的なことではあるのだが、話し方や声の大きさなどはもう少し改善すべきだと他の先生方や教育実習生の授業を見学する中で感じた。
・言葉の選択が難しかったです。人に何かを伝えるとき、話すタイミング、声の大きさ、表情、言葉遣いを瞬時に考えて伝えるために、普段から意識しなければならないと思います。
(4) 教師の多忙さ、仕事量
・その日にやることを把握し、どんなに多忙でも効率よくあらゆる業務をこなしていくのは厳しく、大変だった。その中でも生徒の変化には気をつけ、イレギュラーな動きにも臨機応変に対応することが課題点だと思う。
(5) 体調管理
・やはり初めてのことだらけなので、何をするにも緊張はするし、失敗もたくさんしたが、ずっと引きずってはいけけない。気持ちの切り替えが大切だと思う。又、実習中の体調管理は徹底すべきだとも思う。毎日朝早く夜遅く午前 7 時～午後 10 時頃まで、休日も準備でつぶれる。帰ってからも準備で、毎日四時間睡眠だった。
(6) コミュニケーション能力
・元来、人と話すのが苦手な為、生徒と関わることにかなり臆病になっていた。勿論きちんと交流していたが、精神的にかなりまいっていた。
・人と話をし、思いを伝えるという当たり前のことだが、その難しさ、相手の気持ちを考えることの大切さを改めて実感した。信頼を得ることの難しさも実習を通して感じた。
(7) 指導案作成
・指導案の訂正。自分が何を教えたいのか。生徒達に何を出来るようになってほしいのか、一切妥協せず、授業の計画を作るのは困難であったが、同時にやりがいを感じるものがあった
・指導案にケアレスミスが多くて何度も直してしまった。順序立てて話すこと。生徒は一生懸命聴いてくれるから、少しでも曖昧な順序だと理解が得られなかった。
(8) 実習時の授業諸準備
・やらなければいけないことが多いので、計画はしっかり立てるべき。見落としがあってははいけけないので、メモは常備。笑顔で効率よく仕事をこなす先生方を見ると、私も頑張ろうと思う。私の課題は素早く、優先順位を決められるようになることです。
・私は授業を考えるのにとても時間がかかってしまい、毎日なるべく学校に残って作業をするようにしていたので、帰りが遅くなってしまったことや自分の考えや意見を簡潔に伝えることが出来なかったのも、そういった点が課題だと思いました。

おわりに

本稿では、実習前・実習中・実習後の質問を行い、教育実習指導の今後の課題について検討を試みた。

「A. 教育実習前の質問」の「1. 教育実習に入る前の気持ちについて」では、約 90%が不安感を抱いていた。不安感は授業実践不安と生徒関係不安が大きな要因となっていた。その他の不安として、実習生活への適応と睡眠不足など含む健康面の不安などがあげられる。実習目標やその為の準備等は実習の不安と対峙した授業実践、生徒関係の観点からの回答が多く見られた。

「B. 教育実習中の質問」の「1. 授業実習の内容と発見」の「(6)学習指導案通りに生徒が良く理解できる授業展開ができた。」では、「不十分」と「少し不十分」が約 30%であった。「(4)教材研究、指導案作成で何に苦労しましたか」の回答では、指導案作成における「導入－展開－結論」の内容構成、時間配分、参考資料等の教材準備が約 82%であった。「(7)その他、授業を実習する上でどんな苦労がありましたか」は、授業場面での質問である。回答では、話し方（声量、スピード）、説明の仕方、声のかけ方、板書、授業に集中させることなど臨機応変に取り組む授業展開などであった。「C. 教育実習後の質問」の「3. これだけは準備しておけばよかった、またはこのことについて勉強しておけばよかったと思うことは何ですか。」の質問に対して、約 92%が実習校との事前の打ち合わせ、指導案作成、授業時における参考資料作成と模擬授業の必要性など美術授業に関した回答であった。これらの質問に対して学生から、「事前に研究授業をどの内容でやるのか決めておけば良かった。プリント作成を前もってしておけば実習中がもっと楽だった。指導案が全然書けなかった。もっと指導案を書くための授業をして欲しいと思った。」、「模擬授業などを行ったことがなく、いきなり生徒の前に立つことが不安でした。」な

どの回答が寄せられた。以上の実習前と実習時の教科指導（授業実践）の回答から、学生自身が事前に教育実習校との周知な打ち合わせを行うことや教職課程において教材研究、指導案作成や模擬授業等の教科指導をより一層の充実化させる取り組みが課題であることが明らかとなった。実習生の不安感を軽減させる意味でも重要な課題である。

「B. 教育実習中の質問」の「2 － (3)生徒とのコミュニケーションをとることができましたか」は、生徒関係・生徒理解の質問であった。コミュニケーションがとることができた回答は、「ふつう」を入れて約 70%であった。しかし、約 30%は不十分であったと回答をしている。実習中においては、学級（ホームルーム）活動、掃除活動、昼食活動、部活動、学校行事や学級日誌などの様々な場面で生徒の日々の交流を行っていた。生徒たちの名前を覚え、笑顔で声をかけ、自己紹介プリントや生徒へのアンケートなどを作成してコミュニケーションを図っている。不十分であったと回答した学生も同様な試みをしていた。実習以外にも学習ボランティア活動、ものづくりワークショップ活動、制作展などの取り組みを促すことが大切であるといえる。幅広くコミュニケーション能力を培う機会でもある。

「C. 教育実習後の質問」の「1. 教職志望意識の変化」では、教職志望意識を抱いた者が「c. 教員志望ではなかったが、教員もよいなと思い始めた。」を含めて約 86%であった。教育実習が実習校の生徒たちや先生方に支えられて終えることができた達成感、自己発見、自己肯定感などに裏打ちされている。しかし、「d. 教員志望だったが、教員にならなくなかった」を選択した回答が 10.7%、「e. 教員志望ではなかったが、今もその気持ちに変わりはない」の 3.6%を加えると教職志望に消極的な学生が 14.3%であった。教員にならなくなかった学生や直前に実習を辞退した学生のケアも事後指導の重要な要素である。改めて、実習前における到達目標

の明確化、自己の適性・能力・意欲を確認する事前指導の充実を図る必要性がある。教職への負の回答要因については、今後の課題とする。

平成 28 年 7 月に教職課程実地視察が本学に実施された。視察後、本学に対する講評として、【**一般的事項**】と【**個別事項**】⁽⁴⁾について指摘を受けた。

2016 年度の教育実習生は 132 名で、母校実習が 85%、協力校実習が 15%であった。

2006 年 7 月の中央教育審議会答申での母校実習見直しの提言には、実習校を持っていない本学においては対応できないのが現状である。【**個別事項**】の「4. 学生への教職指導の取組状況及び体制」で、地元の教育委員会や近隣の学校において実習校を確保することが望ましい旨の指摘を受けた。そして、「5. 教育委員会等の関係機関との連携・協働状況（学校現場体験・学校支援ボランティア活動等の取組状況）」で、大学全学的に教育委員会・学校との連携・協働の下に、学生自身が学校ボランティア等の教育実習以外にも学校現場体験の機会を提供するようになどの講評を受けた。

教育実習事後アンケート分析によって明らかになった課題や文科省教職課程実地視察の指摘事項を整理して、今後の事前事後指導の充実改善に反映されるよう努めなければならない。教育実習を終えたときに「教師になりたい!」、「何時の日か教師になろう!」と一人でも望んでくれるような教職課程の充実に関しても取り組んでいきたい。

最後にアンケートに協力をしてくれた 2016 年度教育実習生、実習校の先生方、生徒諸君に感謝申し上げる。

【注】

(1) 中央教育審議会答申（2006 年 7 月）「(3)教育実習の改善・充実」『今後の教員養成・免許制度の在り方について』。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/

[chukyo0/toushin/1212707.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm)

(2) 高野和子・岩田康之(2010)『教育実習』学文社、p.14

(3) 元兼正浩監修(2015)『教職論エッセンス』九州大学大学院教育法制研究室、花書院、p.98

(4) 【**個別事項**】は、1. 教職課程の実施・指導体制(全学組織等)、2. 教育課程（教職に関する科目及び教科に関する科目）、履修方法及びシラバスの状況、3. 教育実習の取組状況、4. 学生への教職指導の取組状況及び体制、5. 教育委員会等の関係機関との連携・協働状況、6. 施設・設備（図書を含む）の状況の 7 項目である

【参考文献】

白山雅彦(2017)「教育実習に向けた教職課程における指導の在り方に関する考察－今年度の教育実習の成果と課題をもとに－」『秋田県立大学総合科学研究彙報』第 18 号、pp.77-93.

山岸知幸・池西郁広*・谷本里都子・高木愛(2016)「教育実習事前事後指導の改善」『香川大学教育実践総合研究』第 32 号、pp.102-107.

篠原一彦(2014 年度)「教育実習生の不安に関する一考察」『佐賀大学教育実践研究』第 31 号、pp.225-235.

今井航、牧貴愛、瀬戸口昌也(2014)「別府大学における教育実習の実践と課題－事後の指導におけるアンケート結果を基に－」『別府大学紀要』第 55 号、pp.247-259.

都築 暢也(2014)「教育実習校における教育実習の諸課題：教育実習生と指導教諭を対象としたアンケートに基づいて」『中京大学教師教育論叢』第 4 巻、pp.29-47.

小林宏己(2004)「教育実習事前指導におけるオリエンテーションの意義と役割」『東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第 28 集、pp.1-10.

油布佐和子（2016）『現代日本の教師－仕事と役割
－』放送大学振興会

元兼正浩監修（2015）『教職論エッセンス』花書院